

関連学会印象記

第32回日本集中治療医学会学術集会

公文啓二*

第32回日本集中治療医学会学術集会は、京王プラザホテルおよび新宿NSビルを会場として東京医科大学麻酔科学教室教授一色淳会長のもと、「集中治療における先進医療と安全性を求めて」をメインテーマに平成17年2月24日～26日の3日間開催され、多数の参加者を集め盛会裏に終了した。報告者は十分に参加したとは言い難い面があり、印象記を書くには役者不足の感があるがご指名により報告させていただく。

学術集会の前日には、理事会、評議員会ならびに木幡美子氏(フジTVアナウンサー)司会のもとすばらしい演出の会長招宴が行われ十二分に鋭気を養うことができた。

学術集会では、医師、看護師、臨床工学士合同部門の特別企画として会長講演「集中治療における鎮静の評価—さわやかな鎮静からの覚醒をめざして—」が次期会長の岩坂先生(関西大学第2内科)の司会のもとで行われた。特別講演として、24日に中嶋宏氏(世界保健機関(WHO)名誉事務局長)による「私のWHO25年」、25日に松井孝典氏(東京大学大学院新領域創成科学研究科)による「地球(生命、文明)の普遍性を宇宙に探る」、26日には桐島洋子氏(作家)「女性の視点からみた医療の安全性について」の3講演が行われた。その中で、残念ながら報告者が拝聴できたのは桐島氏の講演のみであったが、桐島氏が、ホロトロピックすなわち「全体に向かう」医療、人間を全体としてみる統合的な医療にしたいという改革活動をしていることが印象的であった。

メインテーマに沿って「集中治療とリスクマネージメント」と題したシンポジウムが企画され、医師、安全管理対策室、看護師、臨床工学士の7名の

シンポジストが集中治療に関連するリスクマネージメントに関連する発表を行い、それに対して活発な討論が行われた。

医師部門では5題の招請講演、12題の学術講演、6テーマのシンポジウム、5テーマのパネルディスカッションが行われた。招請講演として24日にKansas Medical CenterのSteven W. Site M.D.による「Critical update in critical care medicine」、Duke University Medical CenterのDavid S. Warner M.D.による「Neuroresuscitation: A dying concept or an emerging science」の2題、25日にはベルギーのGent University Hospital, Francis Colardyn M.D.による「New therapeutics in sepsis, what did the patient get?」およびスウェーデン、Lund UniversityのTadeusz Wieloch Ph.D.による「From genes to novel treatment against brain ischemia」の2題、26日にはVCU Medical CenterのM. Ross Bullock M.D.による「How can neuromonitoring techniques help to protect the injured brain?」が行われた。

シンポジウムは24日には「ARDSに対する最新のStrategy」、「集中治療における重症感染症—新しいマーカーの意義と治療への応用—」および「Strategy for neuroprotection in ICU from basic research to clinical application」の3セッション、25日は「周術期管理と長期予後—麻酔科医は長期予後を変えられるか—」および「小児の人工呼吸管理—基礎から見直すその限界と発展—」の2セッション、26日には「集中治療と循環管理」が行われた。

報告者はこのうち、26日のシンポジウム「集中治療と循環管理」を日本医科大学 高野教授とともに座長を担当させていただき光栄に浴した。

パネルディスカッションは24日に「重症患者における非侵襲的モニタリング」、「Evidenceに基づく集中治療における血栓塞栓対策」、「ショックの

*姫路聖マリア病院救急部

病態生理と治療の up-date」および「救急医療における集中治療：最近のトピックス」の4つのプログラムが生まれ、25日には「ICUにおける末期医療のコンセンサス」が行われた。報告者は東京医科大内科学第2講座 山科 章教授とともにパネルディスカッション「Evidenceに基づく集中治療における血栓塞栓症対策」の座長を担当させていただいたが、その中では周術期の肺血栓塞栓症対策やヘパリン起因性血小板減少症(HIT)などの血栓塞栓対策に関する最近の知見が議論され、座長を担当した報告者にとっても極めて有益なパネルディスカッションであった。

医師部門の一般演題はすべてポスターで、会場は新宿 NS ビルで行われ 460 題の演題数であった。

看護部門では、特別講演として齊藤 学氏(精神科医, 家族機能研究所代表)による「児童虐待の診断と対応」、蔵田伸雄氏(北海道大学大学院文学研究科倫理学講座)による「患者の権利と臨床倫理」および若林正氏(東京大学医学研究国際協力センタ

ー研究機関研究員)による「危機状況にある患者の看護—当事者の視点から—」が行われ、シンポジウムとして「照顧, ICUにおける呼吸管理と理学療法」、「より洗練された論文作成を目指して」および「重症集中ケア認定看護師の現場への効果と今後の展望」の3プログラムが用意されていた。

残念ながら報告者は参加することはできなかったが、市民参加型の市民公開講座として新宿 NS ビル1階大広場に集中治療室を設営し、集中治療がどのように行われているかを紹介するとともに、一般市民の方々に集中治療室での治療・看護を理解していただくための講座が24日と25日の2日間にわたり行われていた。

以上の如く、極めて内容の多彩な実り多き学術集会であった。第33回の本学会学術集会は大阪で関西医科大学第2内科教授 岩坂壽二会長のもと、平成18年3月2日から3日間 グランキューブ大阪(大阪国際会議場)で行われる予定である。